抜刀術のあの人が異世界から来るそうですよ？

rearufu

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

後はただ死を待つだけのはずだった。

ふと気付けば、手には紙切れが。

『悩み多し異才を持つ老若男女に告げる。己の才能を試すことを望むのならば、己の家族を、友人を、財産を。世界の全てを捨てて我らの箱庭にこられたし』

「こりゃ何かの皮肉かねぇ…」

タイトルの抜刀術に反応して他のキャラ想像した人ごめんなさい。某抜刀斎では無いのですよ。

刀語のアニメ見て衝動的に書いた。

駄文ですが見てくれたら嬉しい。でもたぶん不定期更新ｍ（＿＿）ｍ

目次

6 ……26
5 ……18
4 ……11
3 ……8
2 ……5
1 ……1

―1―

「これでやっと…ぐっすり眠れる。」
そのはずだった。
斬刀「鈍」（ザントウ・ナマクラ）は虚刀流と共に俺の手から去り、後はただ死を待つだけのはずだった。
ふと気付けば、手には紙切れが。
『悩み多し異才を持つ老若男女に告げる。己の才能を試すことを望むのならば、己の家族を、友人を、財産を。世界の全てを捨てて我らの箱庭にこられたし』
そんな文が書かれていた。
宇練　銀閣（うねり　ぎんかく）は捨てるまでもなく、すべてを無くしていた。
家族同然とまでは言わないが、俺なりに好きだった因幡の民を。
宇練家に代々受け継がれてきた斬刀「鈍」を。
「こりゃ何かの皮肉かねぇ…」
そう苦笑した銀閣は、その言葉を最後にこの世界から姿を消した。

気が付けば銀閣は落ちていた。
これが死ぬ間際に見る走馬燈だろうかと考えているうちに、湖と思わしき場所に着水した。
何がどうしてこうなったかは分からないが、銀閣はどうでもいいと考えるのをやめた。
もはやこの身は死を待つのみ。
出血死が窒息死になろうがさして変わりはない。
そうして意識を手放そうとする寸前、何かに腕を掴まれ水面から引き揚げられる。
「おいおいオッサン。その年で泳げないとか言わねぇよな。ゲームオーバーにはまだ早いんじゃねぇか？」
「し、信じられないわ！溺れて死にかけてる人になんて言いぐさなの！何処の野蛮人よ、貴方は？」

目を開けると変な服を着た子供が、ギャーギャーと喚きながらずぶ濡れの姿で俺を岸へと引っ張り上げていた。
「うるせぇよ。」
終わるはずだった。
その最後を邪魔されキツイ物言いになってしまったが知ったことではない。
早く俺を休ませてくれ。
「ハハッ、このオッサン俺より失礼じゃね？」
そう言って金髪の少年は、引き揚げる為に握っていたその手を離す。
水の中に逆戻りした銀閣は、しかし2人の少女の手によって再び岸に引き揚げられる。
銀閣を引き揚げた少女のうちの1人は、金髪の少年に文句を言う。だが少年も負けじと反論。
銀閣は2人の騒音を聞きながらダルそうにポツリと呟いた。
「うるせぇよ」

「んでオッサン。あんたにもあの変な手紙が来たのか？」
あれから数分。言い争いが終わったのか、金髪の少年がそう問いかけてきた。
「手紙？…ああ、あの変な紙切れか。ああ、来たぜ。」
そう答えながら、銀閣は体の調子を確かめていた。
と言うのも銀閣はつい半刻前までは死にかけていたはずであり、しかし気が付けば傷は何処にも無いという有様だ。
しかも腰には持ち去られたはずの「鈍」まである。
「いや、違うな。」
刀を鞘から抜き見つめる。
其れは斬刀「鈍」では無かった。たぶんコレは俺が「鈍」を受け継ぐ前に使っていた模造品。本物の「鈍」を受け継いだ後は、城の何処かにしまっておいたはずだがなぜ此処にあるのだろうか。
宇練家では代々斬刀「鈍」が受け継がれてきたが、受け継げるのは

成人した後。刀に魅入られた成人前の俺は、少しでもその欲求を満たそうと「鈍」の模造品を作らせた。だが出来あがったのは、見た目だけはそっくりの刀。決して悪い刀では無いのだが、切れ味は本物と比べればナマクラと言いたくなってしまう。
まぁ守るモノの無い今の俺にはお似合いかと苦笑し、刀を鞘に納める。
「…!おい、聞いてるのかオッサン!」
金髪の少年が何やら喚いている。どうやら考えに耽るあまり回りの声が聞こえていなかったようだ。
「歳をとっている事は否定しないが、オッサンはやめろ。宇練銀閣だ。オッサン以外なら好きに呼べ。」
「自己紹介無視したのそっちなのに理不尽じゃね?逆廻十六夜だ。まぁよろしく頼むぜ、銀閣のオッサン!」
悪気が有るのか無いのか、にこやかにそう言い放つ十六夜。
「言ったそばからそれは無いんじゃない。久遠飛鳥よ。よろしく、銀閣さん。」
十六夜に注意してからそう自己紹介をしたのは、育ちの良さそうな服を着た少女。
「春日部耀です…以下同文。」
と猫を胸に抱いた気の弱そうな少女。
「じゃぁな。」
そして用は済んだとばかりに別れを告げ去っていく銀閣。

「おう…はっ!?」
十六夜はつい合いの手で返事をしたが、数瞬して我に返る。他の2人の少女も似たような反応だった。
「ちょちょちょっ!何処行くんだよオッサン!」
オッサン呼びは直らないらしい。
「そうよ!貴方も迷子?なんでしょ!」
「…何処いくの?」
「いきなり去るとかあり得ないのですよ!待ってください!」

去ろうとする銀閣を４人が服を掴んで引き止める。いや、４人の他に何故か猫も着物の裾を噛んで引き止めるかのごとく引っ張っていたが。

「行く当てなんてねえよ。ただ別に此処に居る理由も無えしな。」

此処が何処だかは分からない。

何処に行けばいいのかも分からない。

今はただ誰も居ない場所で、静かに眠りたい気分だった。

「と言うかアンタ誰だ?ずいぶん前からずっと隠れてこっち見てたよな」

十六夜が銀閣にしがみつく４人目にそう言い放つ。

「…はっ!出て行くタイミングを伺っていたのに、つい出てきてしまいました!」

ギャーギャー喚く回りに、銀閣は今日何度目かになるのか数えるのも馬鹿らしくなるセリフを呟く。

「うるせぇよ…」

―2―

「あり得ない。あり得ないのですよ。まさか話をする前に帰ろうとする人が居るなんて。学級崩壊待った無しなのですよ！」

あの後黒ウサギと名乗る女は、半泣きになりながら話しを聞いて欲しいと十六夜たちを引き止めた。

「いいからさっさと話しを進めろ」

促す十六夜に黒ウサギは気を取り直すように咳払いをし説明を始める。

銀閣も眠そうな眼をしながらも一応聞いていた。

「それではいいですか皆様。定例文で言いますよ？ようこそ〝箱庭の世界〟へ！　我々は皆様にギフトを与えられた者だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼンさせていただこうかと召喚いたしました！」

「ギフトゲーム？」

「そうです！既に気づいてらっしゃるでしょうが皆様は、普通の人間ではございません！その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその恩恵を用いて競い合うためのゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力をもつギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！」

両手を広げて箱庭をアピールする黒ウサギに、飛鳥は質問を投げかける。

「まず初歩的な質問からしていい？貴女の言う〝我々〟とはあなたを含めた誰かなの？」

「ＹＥＳ！異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって数多とある〝コミュニティ〟に必ず属していただきます♪」

「嫌だね」

「属していただきます！そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの〝主催者ホスト〟が提示した賞品をゲットできるというとってもシンプルな構造となっております」

「……〝主催者〟って誰？」
「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催されるゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するグループもございます。特徴として前者は自由参加が多いですが〝主催者〟が修羅神仏なだけあって凶悪かつ難解な者が多く命の危険もあるでしょう。しかし、見返りは大きいです。〝主催者〟次第ですが、新たな〝恩恵ギフト〟を手にすることも夢ではありません。後者は参加のためにチップを用意する必要があり、参加者が敗退すればチップは全て主催者のコミュニティに寄贈されます」
「後者は随分俗物ね……チップには何を？」
「それも様々ですね。金品・土地・名誉・権利・人間……そしてギフトを賭けあう事も可能です。新たな才能を他者から奪えばより高度なギフトゲームに挑むことも可能でしょう。ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然――ご自身の才能もう失われるのであしからず」
　銀閣は所々分からない言葉があったものの、文章の前後からなんとか意味を読み取り話を聞いていた。普段は眠そうにしている眼も、今は普段からは想像出来ないほどの真剣な眼をしている。
「ウサギのねえちゃん。ちょっと気になったから聞いときてーんだけどよ。」
「あっ、はい。どういった質問でしょうか？」
　銀閣の問に黒ウサギが反応する。
「例えば、砂漠化した土地を元に戻すってな恩恵もあったりするのかい？」
「…ＹＥＳ。〝主催者〟が修羅神仏のギフトゲームは難関ではありますがその恩恵は計り知れません。恩恵や神格。対象の土地の規模にもよりますが、恐らく可能でしょう。ですが…」
　黒ウサギは言葉を濁す。
「…そっか。まあ、気にするな。質問に答えてくれてありがとよ」
　言葉を濁す黒ウサギを見て銀閣は察してしまった。
　なんとなくそんな気はしていた。
　だが聞かずにはいられなかった。

そして悟ってしまった。もう俺は本当の意味で守るべきものを失ってしまったのだと。もうあの地には帰れないのだと…

―3―

銀閣は流されていた。
流されるまま一行についく
銀閣は自分で自分が今何をしたいのかが分からなかった。
かつては守るべきモノがあった。それが銀閣を剣士たらしめんとさせていた。だが今は。今の俺は何なのだろうか…
答えは出ない。出せない。
故に流され続ける。

「零閃」
――しゃりん
微かな鍔鳴りの音。
音が鳴った刹那には、眼前にあった大木は既に斬られていた。数秒してやっと気づいたかの如く、大木は緩やかに倒れていく。
確かな手応え。これならば剣の消耗は無いだろうかというぐらいの快心の手応え。それ故に銀閣は落胆した。
かつて銀閣の使用していた斬刀『鈍』はあまりにも鋭い切れ味のため、何を斬っても手応えを感じないほどの切れ味を誇った。それ故にその落差に落胆する。
「いきなり何しやがりますか、この御方は！びっくりしたじゃないですか！」
大木の倒れた思いのほか大きな音に驚き、非難の声があがる。
現在一行は黒ウサギの説明終了後、これから所属するであろうコミュニティのリーダーと合流するべく街に向かって移動していた。
その途中で銀閣はふと刀の切れ味が気になり、ちょっと試し斬りをと相成ったわけだが。
「あー、悪い。思ってたより大きな音で俺もびっくりだ。ウサギの姉ちゃんのんびっくりと俺のびっくりで、おあいこってことでひとつ勘弁してくれや」

「それっておあいこって言うのかしら？」
　銀閣の言い訳に飛鳥はあきれたような目を向ける。
「全然おあいこになってませんよ！銀閣さんのびっくりは自業自得じゃないですか！そもそ「おーい！」も…」
　文句を言う黒ウサギの言葉を遮るように聞こえてきた声の方を向けば、子供がこちらに向かって走ってくる。
「あ、ジン坊ちゃーン！」
「お帰り黒ウサギ。門の所で待ってたら大きな音がしたからもしかしてと思って来てみたんだけど。えっと、そちらの三人が？」
「ハハハ、ご心配おかけしました。はいな。こちらの御三人様が…三人？」
　クルリと振り返る黒ウサギ。
　カチンと固まる黒ウサギ。
　キョロキョロと周りを見渡す黒ウサギ。
「えっ、あれ？もう一人居ませんでしたっけ。目つきが悪くて口の悪い問題児を体現したような殿方が」
　殿方と聞いて何故かこちらに視線を向ける飛鳥と耀。俺は問題児じゃ無いと思いつつも、面倒なので声には出さない銀閣。
「殿方って聞いてつい銀閣さんの方見ちゃったけど違うわよね。問題児って十六夜君よね。彼ならちょっと世界の果てを見てくるぜ！って言って駆け出して行ったわ。あっちの方に」
　と指さす。
「なんで止めてくれなかったんですか！」
「止めてくれるなよって言われたから」
「ならどうして黒ウサギに教えてくれなかったのですか？」
「黒ウサギには言うなよと言われたから」
「…ふあ」
「うそです。絶対うそです！はい、ソコ寝ない！実はめんどくさかっただけでしょう御三人さん！」
　返事を聞きもうやだとうなだれる黒ウサギとは逆に、ジンが蒼白になって叫ぶ。

「た、大変です！世界の果てにはギフトゲームのために野放しにされている協力な幻獣がいるんです！」
「幻獣？」
「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に世界の果て付近には強力なギフトを持ったものがいます。出くわせば最後、とても普通の人間では太刀打ち出来ません！」
「あら、それは残念。もう彼はゲームオーバー？」
「ゲーム参加前にゲームオーバー？……斬新」
「冗談を言っている場合じゃありません！」
「はあ……ジン坊っちゃん。申し訳ありませんが、お三人様のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」
　黒ウサギはため息を吐きながら立ち上がる。
「うん。黒ウサギはどうする？」
「問題児を捕まえに参ります。事のついでに――――箱庭の貴族と謳われるこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやります」
　銀閣の理解を超えどうやってか黒髪を赤く染め、近くにあった木々を駆け上がり天辺に辿りつくと空に跳び上がる黒ウサギ。
「一刻ほどで戻ります！皆さんはゆっくりと箱庭ライフをご堪能ございませ！」
　全力で跳躍した黒ウサギは弾丸のように飛び去り、あっという間に四人の視界から消え去っていった。

―4―

黒ウサギが居なくなった後一行は茶屋と思わしき場所に来ていた。個人用の腰掛にそれぞれ座り机を挟み向かい合う。

「コミュニティのリーダーをしているジン＝ラッセルです。若輩ですがよろしくお願いします」

「春日部耀」

「久遠飛鳥よ。そこで眠そうな眼をしているのが」

「ん、ああ。宇練銀閣だ」

ジンが礼儀正しく自己紹介をし、それに倣い三人もそれぞれ名乗った。初対面の時に自己紹介をスルーした前科があったせいか、銀閣は促されてではあったが。

「それでは二人が戻るまで軽く食事でもしながらお話しでも。店員さーん」

ジンの呼びかけに店の奥から猫耳の少女が出てくる。

「いらしゃいませー。御注文はどうしますか？」

「紅茶のセットを三つお願いするわ」

「緑茶と饅頭を頼む」

「にゃー」

「はいはーい。紅茶のセット三つに緑茶一つと饅頭あと猫まんまですねー」

……ん？と全員が首を傾げる。銀閣は態度には出さず心の中に留めたが。

「……もしかして、三毛猫の言葉がわかるの？」

春日部耀が信じられない物を見るような眼で猫耳の店員に問いかける。

「当たり前じゃないですか。私も猫族なんですから」

「にゃーにゃー」

「やだもーお客さんったら……にゃーにゃー」

「にゃー!?」

店員は三毛猫とのやりとりを終えると店の奥へと戻っていく。

「箱庭ってすごいね、三毛猫。私以外に三毛猫の言葉分かる人がいたよ…あと三毛猫は反省して」
　耀は汚物を見るような眼で三毛猫を見る。
「にゃー…」
　堪忍やでお嬢と言いたいのだろうか弱々しく鳴く三毛猫。
「えっ…ちょっと待って。あなたもしかして猫と会話できるの？」
「…うん」
　飛鳥の問いかけに耀はコクリと頷く。
「ち、ちなみにさっきの店員さんと最後のやりとりはなんて言ってたのかしら」
「にゃー！」
「わかってる。三毛猫の名誉の為にもセクハラ発言したなんて言わないようにする」
「にゃー…」
　言っちゃったよと言わんばかりに弱々しくうなだれる三毛猫。
「…ちがう。誘導されたの」
「してないわよ！」
「おんやぁ？誰かと思えば東区画最底辺コミュ名無しの権兵衛のリーダージン君じゃないですか。今日はオモリ役の黒ウサギは一緒じゃないんですかぁ？」
　品の無い上品ぶった声が、和気あいあいとしかけていた場の空気に水を差す。
　声の聞こえた方に視線を向ければ、そこには２ｍを超える巨体をピチピチのスーツで包む変な男が居た。
「僕らのコミュニティはノーネームです。フォレス・ガロのガルド＝ガスパー」
「黙れ、この名無しめ。聞けば新しい人材を呼び寄せたらしいじゃないか。コミュニティの誇りである名と旗印を奪われてよくも未練がましくコミュニティを存続させるなどできたものだ――そう思わないかい、お嬢様方」
　ガルドと呼ばれた男は四人が座る机の空席に腰を下ろし、飛鳥と耀

に愛想笑いを向ける。言葉といい態度といい男は目に入らないのだろうか。いや女性優先なだけかもしれないが。
「失礼ね。同席を求めるのならまずは名乗ったのちに一言添えるのが礼儀じゃないかしら？」
「おっと失礼。私は箱庭上層に陣取るコミュニティ六百六十六の「ケダモノ」傘下である「烏合の衆の」コミュニティ…」
ガルドの話にちょいちょい言葉を挟むジン。
「マテやゴラァァァァ！誰がケダモノで烏合の衆だ小僧ォ！口を慎めや小僧ォ…「変態」紳士で通ってる俺にも……聞き逃せない言葉があ、あ、る、ん、だ…ぜ！」
さらに言葉を被せるジンに顔を獣のごとく豹変させたガルドが襲い掛かる！
『止まりなさい』
飛鳥の警告に、ガルドの動きが止まる。
「……あん？か、体が!?小娘、何をしやがったァァ！」
ガルドは襲い掛かろうとした態勢のまま動かない。いや、動けないのだろうか。
「紳士のくせに言葉遣いがなってないわよ。まぁさっきまでのうわっつらだけの言葉よりはよっぽど貴方に似合ってはいるけどね。事情は良く分からないけど、あなたたち二人の仲が悪い事は良く分かったわ。それを踏まえたうえで質問したいのだけれど」
アスカはガルドに向けていた視線をジンに向ける。
「ねえ、ジン君。ガルドさんが指摘しているコミュニティの状況を説明していただける？」
「そ、それは…」
ジンは言葉を詰まらせ黙り込む。
「レディ、貴女の言う通りだ。よろしければフォレス・ガロのリーダーであるこの私がジン・ラッセル率いるノーネームのコミュニティを客観的に説明させていただきますが」
「……そうね。お願いするわ。あと別に猫被って喋らなくてもいいわよ」

飛鳥はそう言うと不意に指をパチンと鳴らす。
それが合図であったのか、襲い掛かろうとしたままの態勢であったガルドの硬直が解ける。
「…ハハハ。猫なんて被っていませんとも」
顔を引きつらせながらもガルドはジン率いるノーネームの現状を説明していく。
名を無くす前のコミュニティは箱庭上層に食い込むぐらい凄いコミュニティだったことを。
しかしそのコミュニティは箱庭最大にして最悪の天災『魔王』と呼ばれる存在に一夜にして滅ぼされたことを。
そして現在ノーネームとなったジンのコミュニティが如何に不遇であるかを。
「なるほどね。大体理解したわ」
ガルドは飛鳥のその言葉を聞き、手を広げ笑う。
「そうですレディ。名も、旗印も失い、残ったのは膨大な居住区画の土地だけ。その土地にしたってそのほとんどは雑草も生えない死んだ土地だ。そんなところに人が集まると思いますか？」
「そうね……誰も加入したいとは思わないでしょう。…銀閣さん？」
先ほどまでずっと目を瞑って寝ているのか起きているのか分からない銀閣であったが、今はその目を開きガルドを見ている。その事に気づいた飛鳥は何かあるのかと銀閣に声をかけたのだが。
「彼は出来もしない過去の栄華に縋る恥知らずの亡霊でしかないのですよ。旦那もそう思いませんか」
銀閣の反応に興味を持ったと思われたのか、そうガルドが話の矛先を銀閣に向ける。

ガルドは笑う。嗤う。
それはきっとジンのコミュニティに向けてであったのだろう。
だがソレはきっとおれだ。
「わるいのかよ」

「…は？」
見苦しいのかもしれない。
恰好悪いのかもしれない。
「縋って、守ろうとして悪いのかよ」
それでも見かたを変えればソレはきっと必死なだけだ。
守りたいのに何も出来ない。それでも必死に縋り抗う。
「おれはお前が気に入らない。勧誘なら他をあたれ」
そう言い銀閣は腕を組み再び目を瞑る。

「……で、レディ達はどうですか？」
銀閣に脈なしと思ったのか、ガルドは飛鳥と耀にそう問いかける。
「結構よ。だってジン君のコミュニティで私は間に合っているもの」
「春日部さんは今の話どう思う？」
「別に、どっちでも。私はこの世界に友達を作りに来ただけだもの」
「あら意外。じゃあ私が友達一号に立候補していいかしら？私達って正反対だけど、意外に仲良くやっていけそうな気がするの」
「……うん。飛鳥は私の知っている女の子とはちょっと違うから違うから大丈夫かも」
「にゃー」
ガルドそっちのけで盛り上がる二人と一匹。
ガルドは顔を引きつらせつつも負けじと二人に問う。
「失礼ですが、理由を教えてもらっても？」
「だから間に合ってるのよ。春日部さんは聞いての通り友達を作りに来ただけだからどっちでも構わない。そうよね？」
「うん」
「そして私、久遠飛鳥は――裕福だった家も、約束された将来も、おおよそ人が望みうる人生の全てを支払ってこの箱庭に来たのよ。それを比較する為なのだろうけど、人を貶めたうえで迎え入れてやるなどと慇懃無礼に言われて魅力を感じると思ったのかしら。だとしたら自身の身の丈を知った上で出直して来て欲しいものね、このエセ紳

士。いえ、変態紳士だったかしら?」
ガルドは怒りで体を震わせていた。一度ならず二度までもの変態呼ばわり。
「調子に乗ってんじゃねぇぞ小娘がァァァ
『黙りなさい』
ガルドの口が自分の意志を無視したかのごとく不自然に閉じる。
「私の話はまだ終わってないわ。貴方からはまだ聞きださなければいけないことがあるのだから。『貴方はそこに座って、私の質問に答え続けなさい』」
勢いよく椅子に座り込むガルド。何故自分が言葉通りに椅子に座ったのか分からないとばかりに困惑を顔に浮かべる。何か言葉を発しようとしているようだが、その口から声が発するような気配は見られない。
「無駄よ。私の問いかけ以外には喋れないし、今の貴方には座ること以外に身動きをすることはできないわ。私ね、不思議に思ったの」
ノーネームを取り巻く状況を説明された際にガルドは可笑しなことを言った。コミュニティの両者合意でゲームをしかけ、そうやって自分のコミュニティを大きくしてきたと。
「ねえ、ジン君。コミュニティそのものをチップにゲームすることは、そうそうあることなの?」
「やむを得ない状況なら稀に。しかし、これはコミュニティの存続を賭けたかなりのレアケースです」
「そうよね。訪れたばかりの私達でさえそれぐらい分かるもの。そのコミュニティ同士の戦いに強制力を持つからこそ主催者権限を持つ者は魔王として恐れられているはず。その特権を持たない貴方がどうして強制的にコミュニティを賭けあうような勝負をすることができたのかしら。『教えてくださる?』」
抵抗もできずにガルドの口から語られた内容は、身の毛もよだつものであった。
「ここまで絵に描いたような外道とはそうそう出会えないわよ。人質を取って無理やりコミュニティを賭けたギフトゲームの強制。挙げ

句には人質を殺すだけでは飽き足らず食べたですって？その上そのことを人質にとられたコミュニティの人たちはその事を知らないと。ここまでの外道は生まれてこの方見たことがないわ！」

汚物を見るような。いや、ガルドという名の汚物を見てそう言い放つ飛鳥。

「ジン君。今の証言で箱庭の法がこの外道を裁くことはできるのかしら？」

「厳しいです。ガルドのした事は犯罪であり訴えれば箱庭も動くでしょうが、裁かれるまでに彼が箱庭の外に逃げてしまえばそれまでです」

「追放と考えれば裁きと言えなくもないけどそれじゃあ納得いかないわね。貴方のような外道はズタボロになって己の罪を後悔しながら罰せられるべきよ。そこで提案なのだけれど――私達と『ギフトゲーム』をしましょう。貴方の〝フォレス・ガロ〟存続と〝ノーネーム〟の誇りと魂を賭けて、ね」

―5―

「なんですと？いまフォレス・ガロにのリーダーに喧嘩を売ったとおしゃりやがりましたか？しかもゲームは明日？一体どういう心算があってのことですか！聞いてますかお三方！」
「むしゃくしゃしてやった。今は反省してるわ」
「でも後悔はしてない」
「おれは勧誘を断っただけなんだがな」
　問い詰める黒ウサギに、飛鳥・耀・銀閣の順に答える。
　黒ウサギと一緒に戻ってきた十六夜は、少し離れた場所からそのやりとりをニヤニヤと笑って見ていた。
「黙らっしゃい！止めなきゃ同罪です！ああ、どうしましょう。本当ならこの後皆さんを歓迎する為に素敵なお店を予約して色々セッティングしていたのに…」
「原因を作った私達が言うのもなんだけど、別に無理しなくていいわよ。私達のコミュニティって崖っぷちなんでしょう？」
　なぜそれを！と驚く黒ウサギ。
　黒ウサギはすぐにジンが申し訳なさそうな顔をしている事に気づき、自分たちの事情を知られているのだと悟る。
「申し訳ございません。皆さんを騙すのは気が引けたのですが…黒ウサギ達も必死だったのです」
「もういいわ。私は組織の水準なんてどうでもよかったもの。春日部さんはどう？」
「私も怒ってない。そもそもコミュニティがどうの、というのは別にどうでもよかったし」
　二人の返答に黒ウサギはほっと胸をなでおろす。そして残る一人に信じてますよーと小さく呟きながら期待の目を向けた。
　銀閣は寝る場所と食事さえ有れば問題ないと思い、頷く事で同意の意を示す。黒ウサギはそれを確認すると再び胸をなでおろす。本当に信じていたのかと言いたくなる態度であった。
「ありがとうございます。だからと言う訳ではありませんが、先ほど

の件はもう問いません。いつまでも言い争っているのも時間が勿体ないですし、何より私達は仲間になったんですから。つまらない原因で仲違いする方が問題です。それにフォレス・ガロ程度なら十六夜さんがいれば楽勝でしょうし」
　期待してますよーと黒ウサギが十六夜に笑いかけると、何言ってんだお前と呆れた眼を向ける十六夜。
「俺は参加しねえよ」
「当り前よ」
　十六夜の返答に当然よと答える飛鳥。
「な、何でですか！私達は仲間なんですからちゃんと協力しないと！」
　十六夜の力を当てにしていたのか、黒ウサギの抗議の声は必死だ。
「そういうことじゃねえよ。いいか？この喧嘩はコイツらが売った。そしてヤツラが買った。それに俺が手を出すのは無粋だって言ってるんだよ」
「あら、分かってるじゃない」
「……もう好きにしてください」
　今日一日振り回されて疲弊していた黒ウサギは、言い返す気力も無くそう呟くのであった。

「それでは明日のフォレス・ガロとの『ギフトゲーム』に備え、サウザンド・アイズに皆さんのギフト鑑定をお願いしに行きましょう。」
　十六夜は首を傾げて聞き返す。
「サウザンド・アイズ？コミュニティの名前か？」
「ＹＥＳ。サウザンド・アイズは特殊な瞳のギフトを持つ郡体コミュニティ。箱庭の東西南北・上層下層の全てに精通する超巨大商業コミュニティです。幸いこの近くに支店がありますし」
「何しに行くのかしら」
　飛鳥の挙げた当然の疑問に黒ウサギは答える。

「ギフトの鑑定ですね。自分の力を正確に把握していたほうが、引きだせる力はより大きくなります」

黒ウサギを先頭に、一行はサウザンド・アイズへと向かう。

「家鳴将軍？あれ、そんな奴江戸時代に居たっけ？」

「…居ないはず。そもそも今は平成」

「だよな」

「あなたたちは一体何を言ってるのかしら。江戸はまだ分かるけど平成ってなによ」

道中暇つぶしがてら雑談をしていたのだが、話を振られた銀閣がそれに答えたところ話が噛み合わず首を傾げる一行。それを見た黒ウサギは得意げに説明を始める。

「皆さんはそれぞれ違う世界から召喚されてきているのデス。元居た時間軸以外にも、歴史や文化など所々違う箇所があるはずです。自分の居る世界とはちがった歴史を辿った世界出身、なんて事もあり得ます。」

「へぇ、面白いな。」

黒ウサギの説明に十六夜はそう呟くと、皆に何処から来たのかを聞き出し始めた。

「銀閣のオッサンは？」

順番だとばかりに、十六夜がそう問いかけてきた。

「因幡だ」

「……物置？」

「なんで出身を聞いてるのに物置になるのよ。そんな訳ないじゃない。」

「…たしか、私たちの時代で言う鳥取のことじゃないかな」

「まっ」

話をしていると、急に先頭を歩いていた黒ウサギが走り出す。黒ウサギの向かう先には、看板を下げる割烹着姿の女性店員らしき姿が。

「待ったなしですお客様。うちは時間外営業はやっていません」

だが無情にも間に合わなかったようで、言い捨てる店員。

「なんて商売っ気のない店なのかしら」
「ま、まったくです！閉店時間の五分前に客を締め出すなんて！」
「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます」
　店員は冷めたような眼と侮蔑を込めた声で対応する。
「これだけで出禁とかお客様舐めすぎでございますよ！」
　黒ウサギの抗議に店員はなるほどと呟き
「中で入店許可を伺いますので、コミュニティの名前をよろしいでしょうか」
　見下すような笑みを顔に貼り付けそう言った。
「……う」
　何か不都合でもあるのか言葉に詰まる黒ウサギ。代わりに十六夜がなんの躊躇いもなく答える。
「俺達はノーネームってコミュニティなんだが」
「ほうほう。それで何処のノーネーム様でしょうか。良ければ旗印を確認させて頂いてもよろしいでしょうか」
　店員の言葉で一行は気付く。先ほどからのこちらを見下した態度はこちらがノーネームと分かったうえでのことだったのだと。
　黒ウサギにさあどうしますかと店員が視線で促す。
「あの……その……」
「いいいいやっほぉぉぉぉ！久しぶりだくっろうっさぎイイイ！」
　答えられず言い淀む黒ウサギに、突然店内から出てきた真っ白な髪をした和服の少女が跳びかかってきた。
「へぁぁぁ!?」
　少女は黒ウサギに抱き着くと、いきおい余って黒ウサギと共に転がっていく。そして転がった先には浅い水路が。
　――ボチャン。
　二人が水の中に消えて数秒。突然の出来事に固まっていた十六夜が店員に話しかける。
「おい店員。この店にはあんなサービスがあるのか？俺にも是非」
「ありません」

「なんなら有料でも」
「やりません」
『やりなさい』
　飛鳥の発した言葉に店員は馬鹿じゃないのと鼻で笑う。だがそんな事誰が好き好んでやるものかと思う店員の心中とは逆に勝手に動き出す体。
「あ、あれ。なんで私これから突撃するみたいな態勢とってるの？」
「私ね、怒ってるの」
　自分の意志に反して動く体に戸惑う店員に、言葉とは逆にとても良い笑顔を向ける飛鳥。それが合図だったのか、それとも偶然だったのか。十六夜に向かって走り出す店員。
「いやぁぁぁぁぁ！」
「あ、悪い。さっきの和装ロリならともかく、臺の立った女はちょっと…」
　突進する女性店員をひらりと躱す十六夜。
「私はまだ二十代だぁぁぁぁぁぁ！」
　――ボチャン
　叫びながら店員は前の二人と同様に落ちていった。

「生憎と店は閉めてしまったのでな。私の私室で勘弁してくれ」
　あれから一行は白夜叉と名乗る少女に案内され、私室らしき和室に招かれる。
「先程も名乗ったが改めて。サウザンド・アイズ幹部の白夜叉じゃ。黒ウサギとは少々縁があってな。コミュニティが崩壊してからもちょくちょく手を貸してやっている美少女と認識しておいてくれ」
「こう見えて白夜叉様はとってもお強いんですよ」
　煽てる黒ウサギに当然じゃと答える白夜叉。
「私は東側の階層支配者（フロアマスター）だぞ。東側では並ぶものがいない最強の主催者だからの」
　その言葉に十六夜・飛鳥・耀は目を輝かせる。恐らく最強という言

葉に反応したのだろう。
「つまり貴女のゲームをクリア出来れば、私達のコミュニティは東側で最強のコミュニティという事になるのかしら？」
「そうなるのう」
「そりゃ景気のいい話だ。探す手間が省けた」
　十六夜は闘争心を隠そうともせず白夜叉を見る。飛鳥と耀も気持ちは同じなのか白夜叉に挑発的な眼を向け、黒ウサギもはわわわと奇声をあげながら事の成り行きを見守っている。
　盛り上がる場をよそに、銀閣は眼を瞑り腕を組んで静かに座っている。半日ぶりの畳を堪能している訳ではないのだ。最強という言葉に興味が無いだけなのだ。たぶん。
「抜け目ない童達だ。私にギフトゲームで挑むと？まあ受けるのは吝かではないが、ゲームの前に一つ確認しておく事がある。おんしらが望むのは挑戦か――――もしくは決闘か？」
　場の空気が変わる。そして次々と情景が変化していく。黄金色の穂波が揺れる草原。雪で全てを白で染めあげられた森林。次々と移り変わるソレは眼を閉じていたはずの銀閣にさえも見えたことから、眼から送られた情報ではなく直接脳に送りこまれたものだと言われても疑いようのないであろう事象であった。
　唖然と立ち竦む一行に白夜叉は今一度問いかける。一人だけ座ったままだったが。
「今一度名乗り直し、問おうかの。私は白き夜の魔王――――太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんし達が望むのは試練への挑戦か、それとも対等な決闘か？」
「参った。やられたよ。降参だ、白夜叉」
「ふむ？それは決闘ではなく、試練を受けるということかの？」
「ああ。これだけのゲーム盤が用意出来るんだからな――――いいぜ。今回は黙って試されてやるよ、魔王様」
　苦笑しながら白旗を挙げる十六夜に、城夜叉は哄笑をあげた。どうやら素直に負けを認めない十六夜の態度が、白夜叉の笑いのツボを刺激したようだ。

「こんなに笑ったのは久しぶりだのう。さて、では試練を始めようか」
「終わってみればあっという間だったわね」
「だな」
試練は誰か一人でもクリアすれば良いものであった為に、何もせずに終わった十六夜と飛鳥は物足りないような顔をしていた。
「そう言うでない。ここは素直に仲間の健闘を称えておけばよかろう。さて、報酬はギフトの鑑定だったか。本来なら専門外なのだが仕方ない。今回は特別にコイツをやろう」
白夜叉がパン！と柏手を打つと、各自の眼前に光輝くカードが現れる。
それぞれがカードを手に持つと、白紙であったカードに文字が浮かぶ。
「そのカードは名称をラプラスの紙片と言っての。そこに刻まれるギフトネームはおんしらの恩恵の名称。専門外故鑑定は出来ぬが、それを見れば大体のギフトの正体は分かるであろう」
逆廻十六夜・ギフトネーム　正体不明
久遠飛鳥・ギフトネーム　威光
春日部耀・ギフトネーム　生命の目録
宇練銀閣・ギフトネーム　剣士

十六夜のギフトネームが正常に表示されなかった事を議論する横で、銀閣はカードに表示された文字をジっと見つめる。
「おれは――――剣士なのか？」
言葉にするつもりはなかった。だが思わず口をついてしまった。
昨日までの自分なら疑問にも思わなかった。召喚される直前までは、確かに剣士であった。剣士として戦い、守ってきた。守るために戦ってきた。おれには守るものが必要だったから。そうじゃなければおれは――――戦えなくなる。そう思っていた。なら守るも

のの無くなった今の俺は

―6―

「おれは――――――剣士なのか？」

「面白いことを言うなおんし」

銀閣の呟きを耳にし、興味を持ったのか白夜叉が銀閣にそう言った。

「いや、どっからどう見ても剣士だろ」

「恐らくそういう事が言いたいのではないであろう」

十六夜の言葉を白夜叉が窘める。

「忘れてくれ」

思わず口をついた言葉だ。答えを期待したわけではないし、答えられるとも思わない。その答えが出せるのは銀閣自身のみだと分かっているのだ。

「まあそう言うでない。確かにおんしの望む答えは出せぬやもしれんが、その手伝いぐらいはできるかもしれんしの。そうさの、まずはそのカードに表示されているギフトからがいいか。先刻専門外故鑑定は出来ぬと言ったが既知のモノであれば話は別だ。名称は剣士・騎士・戦士と人によって多少の違いはあるかもしれぬが、おんしのギフトはありふれたモノだ」

「弱いってことか？」

十六夜の直球な疑問に、そうではないと白夜叉は首を振る。

「おんしらの個性的なギフトと違い、このギフトは言わばきっかけに過ぎぬ。剣を扱う事に対して人より多少適正があるというだけで、手に入れたからといって持っていた者の強さを手に入れられるようなモノではない。逆に無くなったからといって剣が振れなくなるわけでもない。そういう意味では童達のギフトよりはよっぽど優秀じゃ」

「つまり適正はあってもそれだけでは意味は無いってことよね」

「その通り。そういう意味であればギフトネームを持っていたからといってイコール剣士ではないと言える。なら何を持って剣士とするか分かるか、小僧」

「あれだろ。女が幾つになっても乙女とか言う理論的な」
「うむ。かみ砕いて言えば、要は己の心次第。銀閣、おんし何のために剣を振るう？」
「…ご先祖さまから代々続いてるとか、守りたいものがあったとかいろいろあるんだけどよ。意地…かな」
そう、意地だ。
因幡から人が去っていった時も。刀狩りの時も。賢いやつなら他の道もあっただろう。だがそうしなかった。おれにはそんな生き方しかできなかった。そんな生き方が嫌いじゃなかった。
「答えは出たようじゃな」
「そうだな――――って、いや出たのか？よくわからなかったんだが」
うむうむと頷く白夜叉につっこむ十六夜。
「察しがわるいのう。よいか、こやつにとって剣士とは肩書ではない。生きざまなのだ。そしてその答えは本人にしかだせん」
「それ結局何にも解決してないんじゃないかしら」
「最初に答えは出せぬかもと言うたであろう。だが助言ぐらいはしてやろう。銀閣とやら。とりあえずそこな童たちと行動を共にするがいい。おのしの求める答えは座って考えておっても出るようなものではない。とりあえずでいい。流されてでもいい。人と関わるうちに答えは自ずと出るであろう」
言う通り考えても詮無いこと。銀閣は白夜叉の言葉に頷く。